



第48回

ごはん お米と わたし

作文・図画岩手県コンクール作品集



目次

ごあいさつ	1
JA岩手県中央会 代表理事会長 伊藤 清孝	
図画部門入賞作品	2
作文部門入賞作品	9
総評	16
審査委員長／元岩手大学教職大学院 特命教授 小岩 和彦	
図画部門を審査して	16
盛岡市立下橋中学校 指導教諭 佐々木 俊江	
作文部門を審査して	17
盛岡市教育委員会学校教育課 主任指導主事 山下 るり子	
コンクール入賞一覧	18
コンクール概要	22

図画・作文各部門

1部：小学校1～3年

2部：小学校4～6年

3部：中学校1～3年



いわたて じえい

J A 岩手県中央会

代表理事会長

伊藤 清孝

第48回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、県内各地から作文173点、図画60点もの力作が寄せられました。ご応募いただきました小・中学生の皆さん、とても素晴らしい作品をありがとうございました。

そして、たくさんの応募作品の中から見事に入賞された皆さん、本当におめでとうございます。

また、全国コンクールにおいても、作文部門1点、図画部門2点が優秀賞に選ばれました。心からお祝いを申し上げます。

このコンクールは、次世代を担う小・中学生の皆さんに、日本の豊かな食卓と国土を作りあげてきたごはん・お米、そして稲作をはじめとする農業についての学びを深めてもらうため、JAグループが昭和51年から実施している取組みです。

これをきっかけに小・中学生の皆さんが、家族で食卓を囲むことの幸せを感じたり、お米を作る農家の思いを知り、自分たちが暮らす地域農業について考えたことは、とても貴重な経験となったのではないのでしょうか。

皆さんから寄せられた作品を拝見いたしますと、米作り・稲作体験を通じた苦労や楽しみ、家族で食事を作る様子、ごはんをおいしそうに食べる姿、美しい田んぼの風景に心惹かれた気持ちなど、温かな家族の愛情や、稲作を大事に継承する郷土への愛着など、日頃の体験や出来事を生き生きと的確にとらえていました。

次世代を担う皆さんの意識の高さに、あらためて目を見張るとともに、日本農業の将来やごはん食を中心とした日本型食生活の継承に、大きな期待を抱くことができました。

この作品集をご覧いただく皆さまにおかれましても、子どもたちが全力で取組んだ作品を通じて、ごはん・お米の大切さや農業の価値について、あらためてお考えいただければ幸いです。

「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールは来年度も実施を予定しております。皆さんの素晴らしい作品にまた出合えることを期待しております。

最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、関係する皆さま方のご支援とご協力に感謝申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。



ぜんこくゆうしゅうしょう ぜんこく
全国優秀賞 (全国コンクール)
 いわてけんきょういく いんかいきょういくちょうしょう
岩手県教育委員会教育長賞

「総合文化部活動中～オムライスづくり～」

ちばこはる
千葉心遥

いちのせきしりついちのせきひがしちゅうがっこう ねん
 一関市立一関東中学校 1年



ぜんこくゆうしゅうしょう ぜんこく
全国優秀賞 (全国コンクール)
 いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「思い出の田植」

たなかゆりな
田中優莉奈

いわてちやうりついかたいちゅうがっこう ねん
 岩手町立一方井中学校 2年



図画部門
2部

いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ひがしにほんふきゅうぶんかぎょくちようしよう
東日本普及文化局長賞

「みんな一緒にキャンプ飯」

はやし たい が
林 大 雅
いちのせきしりついちのせきしょうがっこう ねん
一関市立一関小学校 4年



図画部門
1部

じえいはいわてけんごれんかいちようしよう
JA岩手県五連会長賞

「すごくおいしいごはん」

たか はし ゆい と
高 橋 惟 人
にしわがちょうりつゆだしょうがっこう ねん
西和賀町立湯田小学校 2年



図画部門
2部

ゆうしゅうしょう
優秀賞

「真剣なお米とぎ」

たか はし はる いち
高 橋 晴 一

きたかみ しりつ えづり こしょうがっこう ねん
北上市立江釣子小学校 5年



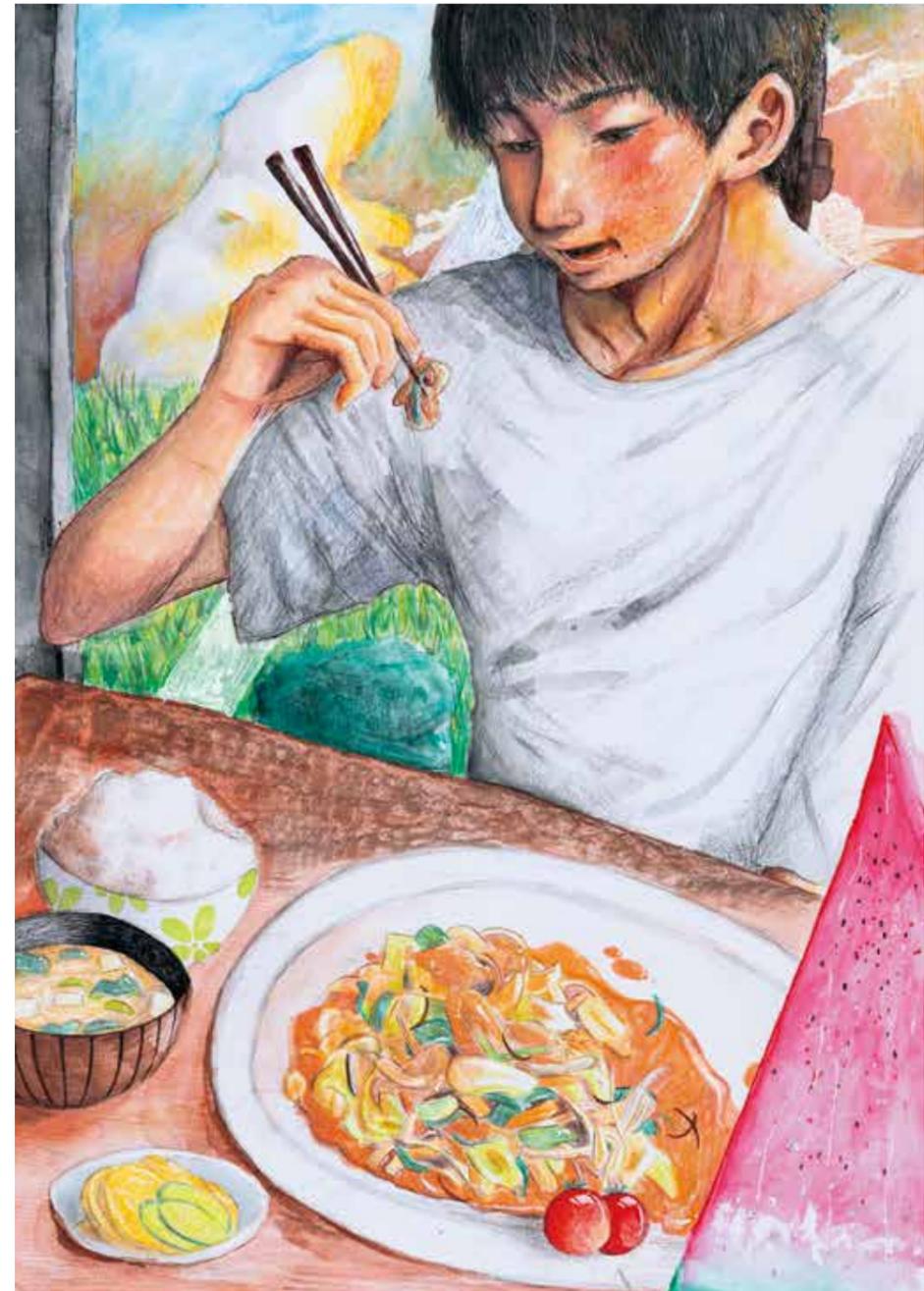
図画部門
3部

かぶしがいしゃ にほんのうぎょうしんぶんとうほく し しょうしょう
株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「食べ盛りの弟」

すが わら ゆい
菅 原 唯

おうしゅう しりつひがしみずさわちゅうがっこう ねん
奥州市立東水沢中学校 3年





ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞 (全国コンクール)
 いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「僕の好きな手作り料理」

おおさきはるく
大崎 泰 玖

いわてだいがくきょういくがくぶふぞくちゅうがっこう
 岩手大学教育学部附属中学校 2年



僕は外食が好きではありません。正確に言うと、僕は家で食べるごはんが大好きなのです。外食もおいしいと思うけれど、お母さんやおばあちゃんの作る料理を食べるのが僕は好きです。家のごはんは作っている過程を音やにおいで感じるのがまず楽しくて、何を作っているのかな、どんな味かなと見ていてワクワクします。お母さんは料理本やインターネットで検索したレシピを分量ピッタリに計って作ります。そのため、基本的にもおいしいです。ただし、仕上りの味に不満があると、「このレシピの人の家庭と我が家は味の好みが変わった。」と言ってがっかりな顔をして食卓に作った料理を出してきます。自分で最後、味見をして調整してみるということもしない、レシピ通りにしか作らない、それがお母さんです。舌の合う料理研究家のレシピの中から献立を決めるのがお母さんの安定のごはんです。僕の大好きなおばあちゃん、岩手県から四百五十キロメートルも離れた栃木県に住んでいます。春休み、夏休み、冬休み等の長期休みにしか会いに行くことが出来ないので、会いに行くとリクエストを聞いてくれて滞在中毎日料理を作ってくれます。おばあちゃんはお母さんと違ってまったくレシピというのを見ません。調味料も目分量や感覚で入っていて、大さじ小さじなど使わずにその辺にあったスプーンを使ったり、計量カップも使わずに料理しています。また、その日に冷蔵庫にあるものを入れてみたり、味も定番ではなく変えてみたりとアレンジもします。感覚で料理するようにサッと作る料理は毎回とてもおいしくてびっくりします。どの料理もおいしくて、僕はごはんが楽しみでおばあちゃんに帰っています。料理上手なおばあちゃんのレシピをお母さんは教わりたけれど、

きちんとした分量のレシピがないのでお母さんが、「今の醤油、どのくらい入れた。」と聞くと、「ぐるっとフライパン一周くらいかな。」とおばあちゃんが答え、お母さんが、「二周はどのくらいの円。量はどのくらい出しながらの一周。」といういろいろ聞いていてその会話に僕はクスッと笑います。そんなおいしいごはんをみんなで食べる時間が僕は大好きです。それぞれの時間を過ごしていた家族がごはんの時間になるとみんな切な時間だと僕は思っています。ごはんの時間はケンカもリセットされる力があるようで、どんなにケンカしていた弟と妹でも隣どうして座って笑顔がみられます。普段無口なおじいちゃんも、ごはんのときは会話が弾みます。栃木に帰った時の恒例でおばあちゃんの料理のベスト発表を一人ずつします。ベスト10を発表するという時間があります。ベスト1については、「お腹を壊すまで食べてみたい。」と口をそろえて笑って話します。栃木に帰るたびにベスト10を理由と共に発表し、前回からの順位の入替えがあるとさらに盛り上がります。ちなみにみんなのランキング上位にいつもいるのはハンバーガーです。僕が大きくなってきて、友達の兄弟が大学生になり一人暮らしを始めたという話が聞こえてくるようになりました。僕も進学先によっては岩手や栃木から離れることもあるかもしれません。今は当たり前前に食べることが出来ているおばあちゃんやお母さんのごはんの一食一食に感謝をし、「おいしかったよ。ありがとう。」とたくさん言っておきたいです。



ゆうしゅうしょう
優秀賞

「大好きなみそ焼おにぎり」

まつだれん
松 田 蓮

はなまきしりつみやのめしょうがっこう
 花巻市立宮野目小学校 6年



きちんとした分量のレシピがないのでお母さんが、

「今の醤油、どのくらい入れた。」

と聞くと、

「ぐるっとフライパン一周くらいかな。」

とおばあちゃんが答え、お母さんが、

「二周はどのくらいの円。量はどのくらい出しながらの一周。」

といういろいろ聞いていてその会話に僕はクスッと笑います。

そんなおいしいごはんをみんなで食べる時間が僕は大好きです。それぞれの時間を過ごしていた家族がごはんの時間になるとみんな切な時間だと僕は思っています。ごはんの時間はケンカもリセットされる力があるようで、どんなにケンカしていた弟と妹でも隣どうして座って笑顔がみられます。普段無口なおじいちゃんも、ごはんのときは会話が弾みます。栃木に帰った時の恒例でおばあちゃんの料理のベスト発表を一人ずつします。ベスト10を発表するという時間があります。ベスト1については、「お腹を壊すまで食べてみたい。」

と口をそろえて笑って話します。栃木に帰るたびにベスト10を理由と共に発表し、前回からの順位の入替えがあるとさらに盛り上がりります。ちなみにみんなのランキング上位にいつもいるのはハンバーガーです。僕が大きくなってきて、友達の兄弟が大学生になり一人暮らしを

始めたという話が聞こえてくるようになりました。僕も進学先によっては岩手や栃木から離れることもあるかもしれません。今は当たり前前に食べることが出来ているおばあちゃんやお母さんのごはんの一食一食に感謝をし、「おいしかったよ。ありがとう。」とたくさん言っ

「おじいちゃんのお米」

た だ あ さ ひ
多 田 朝 飛

きたかみ しりつくろさわじりきたしょうがっこう ねん
北上市立黒沢尻北小学校 3年



「ア、おばちゃんが来てる。」
田植えの朝、父の運転で祖父の田んぼに着くと、盛岡のおばちゃんはすでに田んぼに入れる格好をして、笑顔で私達に近づいて来た。
「兄貴と姉さん（私の祖父母のこと）には来なくていいよ」と言われたけど、来ちゃったと言って笑った。
今年の田植えは、楽しくちよつぱりせわしなくなりそうだな、そんな予感がした。
私も急いで支度をして倉庫を出ると、父はすでに、祖父から説明を受けて田植え機械を操作していた。
おばちゃんは私に気がつくのと、苗を乗せた一輪車をさっそく私に手渡し、父の所まで運ぶようにと指示をした。
初めての一輪車、なかなか思うようには動いてくれない。こんな様子を見ていたおばちゃんは、助けることもなく、「でしょ。見るだけとやってみるのでは大違いでしょ、いい経験だね」
と言って笑っているばかり。
それでも、倉庫と田んぼの往復を何回かくり返すうちに、自由に動かせるようになった。
苗運びが一段落すると、おばちゃんから次の指示が来た。隅っこの手植えだ。
去年もやったが、田んぼに足をとられ尻もちをついてしまい、さんざんだった作業。
今年こそはと田んぼに入ったのだが、やつぱり足がうまく抜けず苦戦していたその時、
ぼくのおじいちゃん、おばあちゃんの家では、お米を作っています。お米がなくなるとおじいちゃん、おばあちゃんの家にもらいに行きます。
「たくさん食べておおきくなれ。」
と、ふくろいっぱいのお米を持たせてくれます。こんなにたくさんもらってしまつて、おじいちゃんたちの食べる分がなくならないか、しんぱいになります。おじいちゃんは、「たくさんあるからだいじょうぶだ」と言います。ぼくは、たくさんできるお米がどうやって作られるか気になって、四月にお父さんといっしょに種まきの手伝いに行きました。
なえばこに土を入れて平らにします。それをベルトコンベアにのせると、自動でたねがまかれます。そのあと、びょうきにならないためのくすりの入った水がかかけられます。また、そこに土をかぶせてなえばこのかんせいです。おじいちゃんはいっしょうけんめい働いていました。そのあと、

「つま先から入って、かかとから先に出る」と、後ろからおばちゃんの声。
言われた通りやってみると確かに楽だ。
普段はおもしろいおばちゃんだが、この日はちよつぱりカッコいいと思った。
一枚の田んぼを終えた所で、二人しかいないのにおばちゃんは「女性陣は休憩」と言つて、休憩をとってくれた。休憩をしながらおばちゃんは、昔の田植えの様子など楽しい話してくれた。
農作業はズルして逃げ、兄貴にまかせていた事や、こびりの準備だけは真面目に手伝つて田んぼに運び、土手一列に並んで皆で食べた事など興味のある話ばかりだった。
そこへ祖母が昼食を作つて来てくれた。
バスケットの中をのぞくと、黒いおひつが入っていた。気になってふたを取ってみると、湯気といっしょに炊き込みご飯のいい匂いがした。匂いを嗅いだら急にお腹がすいたので祖母に「食べていい？」と聞く。
「本当は皆が揃つてからだけど、頑張つたから早目の昼食にする？」と言つて、女性三人、にぎやかな食事となつた。皆で食べたせいか働いたせいか、こびりは今も昔もおいしい物だと思つた。
帰る時、祖母が残つたご飯をおにぎりにして一つ持たせてくれた。お兄ちゃんへと言われたが、帰りの車の中で食べてしまった。
一か月くらい、毎日おじいちゃんが水まきをして、おんども見ます。大きくなつたなえを田植えきで植えます。秋まで草取りとひりょうまきなどをやります。おじいちゃんは、毎日田んぼの様子を気にしています。今は、70センチメートルくらいまで大きくなりました。青々としたいねのなえの先にたくさん実がなつて、重みであたまがたれさがつてきました。いねかりまでもう少しです。おじいちゃんは、お米のことをいつも気にして、こうしてお世話をしているんだなあと思いました。ひとつぶのたねから、たくさんのお米をつける、いねつてすごいなあとも思いました。
ぼくはチャーハンが大好きです。お米ができないとチャーハンも食べられません。だから、お米をつくつてくれるおじいちゃんをおうえんしたいです。おじいちゃんががんばつて作っているお米を、大事にのこさず食べたいです。おじいちゃん、ありがとう。

「こびり」

に っ た と う こ
新 田 透 子

きたかみ しりつくろさわじりにししょうがっこう ねん
北上市立黒沢尻西小学校 6年



「ア、おばちゃんが来てる。」
田植えの朝、父の運転で祖父の田んぼに着くと、盛岡のおばちゃんはすでに田んぼに入れる格好をして、笑顔で私達に近づいて来た。
「兄貴と姉さん（私の祖父母のこと）には来なくていいよ」と言われたけど、来ちゃったと言って笑った。
今年の田植えは、楽しくちよつぱりせわしなくなりそうだな、そんな予感がした。
私も急いで支度をして倉庫を出ると、父はすでに、祖父から説明を受けて田植え機械を操作していた。
おばちゃんは私に気がつくのと、苗を乗せた一輪車をさっそく私に手渡し、父の所まで運ぶようにと指示をした。
初めての一輪車、なかなか思うようには動いてくれない。こんな様子を見ていたおばちゃんは、助けることもなく、「でしょ。見るだけとやってみるのでは大違いでしょ、いい経験だね」
と言って笑っているばかり。
それでも、倉庫と田んぼの往復を何回かくり返すうちに、自由に動かせるようになった。
苗運びが一段落すると、おばちゃんから次の指示が来た。隅っこの手植えだ。
去年もやったが、田んぼに足をとられ尻もちをついてしまい、さんざんだった作業。
今年こそはと田んぼに入ったのだが、やつぱり足がうまく抜けず苦戦していたその時、
ぼくのおじいちゃん、おばあちゃんの家では、お米を作っています。お米がなくなるとおじいちゃん、おばあちゃんの家にもらいに行きます。
「たくさん食べておおきくなれ。」
と、ふくろいっぱいのお米を持たせてくれます。こんなにたくさんもらってしまつて、おじいちゃんたちの食べる分がなくならないか、しんぱいになります。おじいちゃんは、「たくさんあるからだいじょうぶだ」と言います。ぼくは、たくさんできるお米がどうやって作られるか気になって、四月にお父さんといっしょに種まきの手伝いに行きました。
なえばこに土を入れて平らにします。それをベルトコンベアにのせると、自動でたねがまかれます。そのあと、びょうきにならないためのくすりの入った水がかかけられます。また、そこに土をかぶせてなえばこのかんせいです。おじいちゃんはいっしょうけんめい働いていました。そのあと、

「未来へつながる田んぼアート」

きく ち さ き
菊池 咲 希

いちのせき しりつさくらまちちゆうがっこう ねん
一関市立桜町中学校 2年



「すごいのみせるかー？」
温泉の帰り、私はじいちゃんに言われた。
「なにに。みたい。」
私は答えた。見せられた物は想像をこえる素晴らしい田んぼアートだったのだ。平泉の緑一面に広がる田んぼに、松尾芭蕉が描かれていたのだ。この田んぼアートを見た時、どうやって作り上げたのか？という疑問が頭に浮かんだ。今までで、緑色に広がっている田んぼしか見たことがなかったから。
学校の行事で田植えを手作業でやり、時間がものすごくかかり大変だった。今は機械化が進んでおり、一ちようぶ二時間ほどで苗が植えられているが、昔手作業でやっていた人達はいったい何時間かかっていたのだろうか？私は思わず考えこんだ。
田植え体験をした時は、JA平泉の方達が丁寧に田んぼの中に線を書いたり、わりばしをさし、まっすぐ苗を植える工夫をしてくださったので何とか植えることができたが、ものすごく難しいと感じた。
田んぼアートは田んぼをキャンパスに見立て色の異なる稲を使って、巨大な絵や文字を作り出すプロジェクトだ。これもそんな簡単な活動ではないし、手間がかかるけども面白くてクリエイティブな活動だとネットに記載されていた。人に感動をくれるすごい迫力のある絵だと私は思う。
田んぼアートは美しいだけでなく、地域の人々が一緒になって作り上げることで、チームワークや協力の大切さを学べると思った。アートを通じて自分達の地域をアピールすることができる点も素晴らしい所だと思う。思い描いたデザインを実際に田んぼに描き上げるプロセスは、創造力を駆使してアイデアを形にする楽しさを感じるチャンスでもある。作品を完成させるためには、稲が成長して色が変わるのを待つ必要がある。こ

の間、地道な努力と忍耐が必要だがその成長を見る瞬間は、とても嬉しいものだと思う。
このように、田んぼアートは大きな成果を得るために努力を続けることの大切さを教えてくれるものだと思う。このアートは、自然とアートが融合した素敵なアイデアだ。これを通じて、私たちは自分の想像力やアートの力、そして地域との結びつきを深めることができるのだ。
観光名所としてもこの田んぼアートは人気がある。私が見に行つた時も何人か訪れていた。異なる種類の稲や草を組み合わせることで、季節ごとに異なる風景を楽しむことができる。魅力は、その繊細なデザインと豊かな色彩なことだ。田んぼアートを訪れる人々も増え、地域の活性化にも寄与している。自然の美しさと農業の重要性を考えるきっかけにもなる。美しいアートを通じて、農業や地域への興味を深めることができるだろう。
アートは、私たちに自然の美しさと農業の大切さを教えてくれる素晴らしいアートの形だ。その色鮮やかな絵画は、季節の移り変わりと共に私たちを楽しませてくれる。夏休み中にたくさんさんの田んぼアートを訪れてみたいと思った。その美しい景色と地域の人々の努力と協力が生み出すアートを通じてお米や自然にふれ合っていきたいと思う。
近年高齢化が進んでいるので少しでも農家にあたえる負担を減らせるように自分ができる米を残さず食べることをこれからも頑張りたいと思う。また、毎日必ず食べているお米がなくなつたら、健康でいられないと思うので、米を作ってくれているじいちゃんや流通関係者の方々に感謝して、暮らしていきたいと私は思った。自分達が植えた苗がすくすくと成長することを祈っている。

「はじめてのたいけん」

やま ね とし ひさ
山 根 駿 寿

いちのせき しりつやまのめしやうがっこう ねん
一関市立山目小学校 3年



「お金を入れてください。お金を入れてください。」
ぼくは、ワクワクしている。
おじいちゃんが、いっしょけんめい作ったお米を、せ
い米しようとしているからだ。
お金を入れて、ひょうじゆんボタンをおす。お母さんと
力をあわせて、お米を入れる。「ザーザー」と、いきおい
よくすいこまれていき、早く白くなったお米が出てこない
か、楽しみでしかたがない。
「おまちどうさま。」
といわんばかりに、一つぶ一つぶとびだしてきた。まぢき
れないぼくは、ペダルを強くふみこみ、ふくろの中にお米
たちをなんどもゆうどうした。
できあがり十秒前、いっしょにカウントする。さいごの
一つぶまでもち帰ろうと、何どもペダルをふみ、おちてこ
ないかかくにんした。
できあがつたお米に手を入れると、とても温かかった。

「早くお米といて食べたい。」
とさげんだ。
家について、ふくろを開けても、まだまだ温かいお米の
顔を、ぼくはつめたいお水でやさしくあらつてあげた。
お水のりようをかくにんして、すいはんきのスイツチを
おした。
今日の夜ごはんは、ぼくの大好きなカレーライス。
「ピーピーピー」できあがりといっしょにふたをあけた。
ちよつとやわらかいけど、まっ白でふわふわなごはんがで
きた。
あつあつごはんは、あつあつのカレーをかけて、
「いただきます。」
おじいちゃん、次もぼくがせい米するからね。

「お米とわたし」
よないことね
米内琴音

いちのせきしりつさくらまちちゅうがっこう
一関市立桜町中学校 2年



「お米一粒には七人の神様がいるんだよ。」
母の口ぐせだった。七人の神様とは、お米を作るために必要な太陽、雲、風、水、土、虫、人の七つのことをいうらしい。私は、この母の口ぐせを毎日、毎食、耳にタコができるほど聞かされてきた。しかし、最近では、この母の口ぐせが聞こえてこない。それは、毎日、残さず、おいしいご飯を食べているからだだろう。最近「お米一粒には七人の神様がいる」この言葉の意味を実感できた。農業体験を通してだ。

六月一日。石拾いをした。開拓されて、あまり経っていないらしく、石が多かった。大きい石もあれば、小さい石もあって、丸い石もあれば、機械とぶつかって切れたような形の石もあった。石拾いの前に、

「石で機械がこわれることがあるから、しっかりと拾って」と、教えていただいた。この石は大丈夫だったんだろうけど、他の石は、機械をこわしてしまう可能性がないとは限らないから、一生懸命に探して、拾った。夢中だった。気が付けば、汗が垂れてきた。下ばかり見て、石を探していたけれど、空では、太陽も雲から出て、石を探すのを手伝うように照らしてくれているような気がした。この日は、石拾いをして、七人の神様の内、土と特に関わった。米作りといったら、田植えのイメージが強い。しかし、その前に石拾いをして、土の環境を良くすることで、これから、機械を使って、作業をすることができるようになるのだと思っただ。石拾いは、機械がなくて、大変だが、大切な作業だと感じた。

六月二十一日。田植えをした。この前、石拾いをした田んぼには、水が張られていた。そして、田んぼにこの原稿用紙のよくなマス目ができていた。線の交わったところに、苗を植えていくらしい。初めて田んぼに入ってみると、不思議な感じがし

た。思っていたよりも、田んぼはぬかるんでいて、動こうとすると、転びそうになった。しかし、部活の体幹トレーニングのお陰か転ばずに済んだ。田植えは、まず、苗の束から三〜四本くらいをとって、筆と同じように持ち、まっすぐに植えていく。初めの内は、植える深さが浅すぎて、倒れてしまっていたけれど、慣れると、スムーズに田植えをすることができた。けれども、農家の方は、もっと速くて、正確だった。農家の方の技術の高さが田植えを体験することで、理解できた。この日は、田植えをして七人の神様の内、人と特に関わった。機械を使って、田植えをする様子を見た。速くて、正確だ。そして、必要な人の数も少なく、良い。現在の日本の農業は高齢化による担い手不足などの課題もあるため、機械は必要だ。しかし、農家の方やその技術に対して、惜しむ気持ちも出てきてしまった。

「お米一粒には七人の神様がいます」石拾いや田植えを体験して、七人全ての神様について考えることは、できなかった。しかし、調べてみると、太陽と雲が調和し、ほどよく日光が当たる。水と土が調和し、水田の環境が保てる。風が受粉を助け、虫が害虫を退治。そして、人、農家の方が苦労しながら、お米を育ててくれる。本当に神様だ。七人の神様に感謝しよう。お米をむやみに残す、捨てることがないように努力しよう。お米だけではないだろう。魚・肉・野菜や果物などもだ。全ての食べ物に感謝しよう。全ての食べ物に関わった全てに感謝しよう。そして、全ての食べ物をむやみに残す、捨てることがないように努力しよう。決して簡単なことではない。すごく難しいことだ。だからこそ、みんなで頑張ろう。この考えが大切なのではないだろうか。

「世界の米料理のはじまり」
おおむらめい
大村愛苺

ふだいそんりつふだいしょうがっこう
普代村立普代小学校 5年



お米は、様々な料理の材料として活躍している。カレーライス、チャーハン、お寿司など、アレンジすることできらに美味しくなるお米は、まるで料理界の主人公のようだ。そこで私は、世界の米料理の発祥を調べてみることにした。

例えば、カレーライスは、日本だけではなく世界中で愛されている。お米があるからこそ、おいしいと思ってもらえる料理だ。カレーの発祥は、元々はインドで、一六〇〇年にイギリス本国へ高級インド料理として伝えられた。そんなイギリスから日本にカレーライスが伝わったのが、明治四年ごろで、物理学者の山川健次郎という人物がきっかけだという。米国留学に向かう船上で、カレーライスに出会ったとされている。日本人の主食であるお米と一緒に食べられたことが、広がる理由になったのではないだろうか。

私の好きな料理であるチャーハンの発祥は中国である。日本に伝わったのは、七〜八世紀ごろだが、当時の「ゴマ油で米を炊く」方法はあまり広がらなかった。日本では、残りのご飯を使い、油で炒める調理法が編み出され、「焼き飯」として普及したそうだ。最後までお米を大切に食べようとする日本人の思いと工夫が感じられる。

ご飯を彩りよくさせるスペイン料理であるパエリアの発祥の地は、バレンシア地方だった。バレンシアの人々にとって、パエリアは日曜日に家族で集まって食べるほど愛され

るソウルフードで、その分こだわりも強い。日本では海の幸を入れるイメージだが、バレンシアでは山の幸がメインとされており、国によってお米の楽しみ方が違うことがよく分かる。

日本を代表とする料理、お寿司。実はお寿司の発祥は日本ではなく、東南アジアだそうだ。当時、山岳地帯に住んでいた民族にとって、入手困難だったのが魚だ。それを長期保存するための方法として作られた「熟鮭(なれずし)」とよばれる発酵食品がお寿司の起源であると言われている。江戸時代中期には、発酵させる必要のない「早寿司」が誕生し、待たずにすぐお寿司を食べられる時代が訪れた。さらに、江戸時代後期になると、握り寿司が考案されたが、おむすび並みの大きさに食べにくかったため、切り分けて食べられるようになった。時代が進むにつれて、より多くの人が楽しめるように、ネタの種類が豊富になり、サイズも小さくなっていったのだろう。

多くの人達の知識や工夫、食べ物に対する思いなどが、味や形を変えながら現代に伝えられてきたのだ。だからこそ、食を大切にしようとする思いをこれからも繋いでいくべきである。これまでの歴史を考えながら、様々な世界の米料理を味わって食べ、お米を大切にしていきたい。

総評

審査委員長



元岩手大学教職大学院 特命教授 小岩和彦

第48回「ごはん・お米とわたし」作文・図画岩手県コンクールが、主催者および関係各位の皆様方のご尽力により今年も無事開催されたことに感謝申し上げます。ありがとうございます。

今回のコンクールには、作文の部に173点、図画の部には60点、合計233点というたくさん応募がありました。作品の応募に当たって、様々な指導いただいた各学校の先生方から感謝申し上げます。そして、県代表として出品した全国コンクールでは、今年も作文の部で1点、図画の部で2点の優秀賞を受賞することができました。このことは、岩手の子どもの作品のレベルの高さを示すものでありとても素晴らしいことだと思っております。

審査をさせていただき、応募してくれた皆さんが様々な思いを持ち、それを大事にしながら一生懸命作品を作り上げたのだということが伝わってきて、とてもうれしく思いました。

本コンクールには、作文の部・図画の部の2つの部門がありますが、どちらの部門にも共通していたことがあったように思います。それは、日本人の主食とも言えるお米・ごはんについて、自分の日常の何気ない一コマに目を向け、そこで感じたことや考えたことを、他の人の真似ではなく、自分の感性

を大事にして作品を作り上げていたということです。作文の部では、お米を通して家族との触れ合いや大切な人への思い、感謝の気持ちなどが自分の言葉で素直に表現されていました。文章構成なども工夫されているなあと感じました。図画の部では、友達と一緒に料理をしている様子、家族と一緒においしそうにごはんを食べている様子や、おいしいお米を作るために、一生懸命田植えをしている様子などがとても素直に丁寧に描かれていました。表情もとても豊かで、見た人がほのぼのとするような作品が多かったと思います。

作品を作り上げていく上で技術的な面を磨くということも勿論必要ですが、それ以上に大切なことは、自分が伝えたいと思うことを自分なりに素直に表現することではないかと考えます。どこから借りてきたものではなく、自分の感性で感じ取ったことをそのまま表現することが大切だと思います。そのことが、作品を読む人に見る人に伝わった時に大きな感動を与えるのではないのでしょうか。

児童生徒の皆さんには、これからも自分の身の回りの出来事に対して敏感に感じ取る心を持ち続けながら、さらに自分なりの素晴らしい作品を作り上げていってほしいと思います。来年もたくさん作品が寄せられることを期待しています。

最後に、今回審査員として児童生徒の皆さんの素晴らしい作品に触れる機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会 学校教育課 主任指導主事 山下るり子

今年度も多くの児童生徒の皆さんから応募をいただきました。どの作品も、自分の生活と「ごはん・お米」との関わりについて、五感を通して感じたこと、考えたことをしっかりと綴っていることに嬉しさを感じます。

岩手県知事賞を受賞した大崎泰玖さん（岩手大学附属中学校2年）の「僕の好きな手作り料理」は、レシピ派の母親と目分量派の祖母の料理を、14歳の視点でユーモア溢れる比較をしながら、どちらにもそれぞれの美味しさがあり大好きだと綴る泰玖さんの人柄と文才に魅了される作品です。祖母の料理を「お腹を壊すまで食べたい」と笑い合う家族の幸福感が、この作品を一層輝かせています。

岩手県教育委員会教育長賞を受賞した新田透子さん（北上市立黒沢尻西小学校6年）の「こびり」は、田植えのエピソード、叔母の人柄、叔母へのリスペクトが、映像的な効果を醸し出す表現力でまとめられた魅力的な作品です。透子さんの世界に引き込まれたまま一気に結末までいざなわれ、短編小説を読み終えたような充足感に満たされます。

J A岩手県五連会長賞を受賞した多田朝飛さん（北上市立黒沢尻北小学校3年）の「おじいちゃんのお米」は、米作りをよく観察し、祖父の姿や稲の実りに感動したことを素直に表現している作品です。大好きなチャーハンのため米作りのおじいちゃんを応援したい

図画部門を審査して



盛岡市立下橋中学校 指導教諭 佐々木俊江

図画作品の審査を通して、子供たちの豊かな感性を感じることができ、幸せな気持ちになりました。さらに今回は、全国審査において中学校2点が優秀賞に選ばれるなど、優れた作品が多く、感動いたしました。

子どもたちの溢れる思いや豊かな表現が詰まった作品ばかりで、審査が大変難しかったことを申し添えます。

全国審査優秀賞並びに岩手県知事賞を受賞した田中優莉奈さん（岩手町立一方井中学校2年）の作品「思いの田植」は、田んぼの水に足を入れながら楽しそうに田植えをする二人の様子が、柔らかく優しい色合いで丁寧に描かれている秀作です。透き通る水の表現や人物の楽しそうな表情など、表現の素晴らしさに感動するとともに、作品全体の雰囲気にも引き込まれる、魅力のある作品です。

全国審査優秀賞並びに岩手県教育委員会教育長賞を受賞した千葉心遙さん（一関市立一関東中学校1年）の作品「総合文化部活動中〜オムライスづくり〜」は、ごはんと自分の中学校生活の様子を結び付けて、生き生きと表現している秀作です。二人の人物の配置やオムライスのオレンジ色を引き立たせる周囲の色遣いなどに工夫が見られる素晴らしい作品です。

J A岩手県五連会長賞を受賞した高橋惟人さん（西

という結びも微笑ましく、朝飛さんの飾らない思いや表現に好感が持てます。

家の光協会東日本普及文化局長賞を受賞した山根駿寿さん（一関市立桜町中学校2年）の「はじめてのたいけん」は、「お金を入れてください」という書き出しで読み手をひき付け、祖父のお米を精米することへの駿寿さんの思いを、優れた構成と表現で印象的に伝えてくる作品です。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した菊池咲希さん（一関市立桜町中学校2年）の「未来へつながる田んぼアート」は、地域に賑わいが戻った証となる作品とも言えます。田んぼアートは地域の活力となり、自然保護や農業活性化にも一石を投じるという主張に頼もしさを感じます。

優秀賞を受賞した大村愛母さん（普代村立普代小学校5年）の「世界の米料理のはじまり」は、世界の米料理の歴史について調べたことと考えたことがよく整理され、効果的な構成と表現でまとめられた作品です。

同じく優秀賞を受賞した米内琴音さん（一関市立桜町中学校2年）の「お米とわたし」は、米一粒の中の7人の神様を稲作体験で実感し、あらためて「食」「自然の恵み」に感謝の念を深めるといふ質の高い作品です。

学校奨励賞は、一関市立桜町中学校です。応募作品数も多く、そのすべてが構成及び表現に優れていました。うち二作品が入賞した実績が高く評価されている受賞です。

入賞作品は勿論のこと、多くの応募作品から、お米への感謝の気持ち、家族への愛情、そして、稲作を大事に継承する郷土への愛着が伝わってきました。今後、子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、表現する機会を大切にしてください。

全国コンクール

優秀賞

- 田中 優莉奈 岩手町立一方井中学校 2年 「思い出の田植」
- 千葉 心 遥 一関市立一関東中学校 1年 「総合文化部活動中〜オムライスづくり〜」

岩手県コンクール

岩手県知事賞

- 田中 優莉奈 岩手町立一方井中学校 2年 「思い出の田植」

岩手県教育委員会教育長賞

- 千葉 心 遥 一関市立一関東中学校 1年 「総合文化部活動中〜オムライスづくり〜」

JA岩手県五連会長賞

- 高橋 惟人 西和賀町立湯田小学校 2年 「すごくおいしいごはん」

一般社団法人家の光協会東日本普及文化局長賞

- 林 大雅 一関市立一関小学校 4年 「みんな一緒にキャンプ飯」

株式会社日本農業新聞東北支所長賞

- 菅原 唯 奥州市立東水沢中学校 3年 「食べ盛りの弟」

優秀賞

- 高橋 晴一 北上市立江釣子小学校 5年 「真剣なお米とき」
- 松田 蓮 花巻市立宮野目小学校 6年 「大好きなみそ焼おにぎり」

学校奨励賞

- 二戸市立福岡小学校

佳作

1部

- 林 空我 一関小 1年 「ごはんのおてつだい」
- 高橋 千恵 江釣子小 2年 「ごはんもる
かかりはわたし！」
- 菊池 大杜 向中野小 2年 「おかえり！ばあーさん！
めしあがれ」

2部

- 向川原 颯 福岡小 4年 「おいしいお米を
いただきます」
- 高橋 優心 佐倉河小 5年 「お米を大切に育てる私」
- 柏田 幸梓 厨川小 6年 「おいしいなほくのお赤飯」
- 玉澤璃知佳 藤沢小 4年 「熱々ごはん
おにぎり作り」
- 白岩 拓真 福岡小 4年 「おいしいお米を
育てるぞ!!」
- 中井 琳香 福岡小 4年 「おいしいお米は
元気のもと」

3部

- 村上 叶汰 若柳小 5年 「おにぎりおいしいね」
- 佐々木陽翔 前沢中 2年 「お米と笑顔」
- 小野寺 純 前沢中 3年 「学級のみんなど食べる
給食の地元ごはん」
- 小泉 乃々 大船渡中 2年 「お母さんのおにぎり
おいしいな」
- 斎藤 叶 花泉中 1年 「稲とおにぎり」

作文部門入賞

全国コンクール

優秀賞

大崎 泰玖 岩手大学教育学部附属中学校 2年 「僕の好きな手作り料理」

岩手県コンクール

岩手県知事賞

大崎 泰玖 岩手大学教育学部附属中学校 2年 「僕の好きな手作り料理」

岩手県教育委員会教育長賞

新田 透子 北上市立黒沢尻西小学校 6年 「こびり」

JA岩手県五連会長賞

多田 朝飛 北上市立黒沢尻北小学校 3年 「おじいちゃんのお米」

一般社団法人家の光協会東日本普及文化局長賞

山根 駿 寿 一関市立山目小学校 3年 「はじめてのたいけん」

株式会社日本農業新聞東北支所長賞

菊池 咲 希 一関市立桜町中学校 2年 「未来へつながる田んぼアート」

優秀賞

大村 愛 苺 普代村立普代小学校 5年 「世界の米料理のはじまり」

米内 琴 音 一関市立桜町中学校 2年 「お米とわたし」

学校奨励賞

一関市立桜町中学校

佳作

1部

山田 遥大 桜城小 3年 「お米が食べられるのは 「いただきます」

高橋 千恵 江釣子小 2年 「おこめ大すき、 あたり前じゃない」

千葉 諒太 一関小 2年 「かぞくでいっしょにごはん」

佐々木緋奈 黒沢尻北小 3年 「毎日食べたいくりごはん」

鎌田 志飛 江釣子小 1年 「ごはんとわたし」

佐藤 朱莉 矢作小 2年 「わたしが大好きなこと」

相原 集 仙北小 2年 「海せんどんがうまいひみつ」

山田 永菜 桜城小 4年 「こだわり、 ぜっさん発き中」

平沢 慶佳 一関小 5年 「祖母のおこわごはん」

玉澤璃知佳 藤沢小 4年 「十さいの私と お米とごはん」

玉澤歩風乃 一関第一高等 学校附属中 2年 「先生の言葉」

木村 太郎 桜町中 2年 「人類にとっての米とは」

青木 寧々 桜町中 2年 「当たり前ではない幸せ」

菊池 俊太 桜町中 2年 「未来の農業について 考える」

須田 心菜 山目小 5年 「ごはんと私の戦い」

三上 莉穂 津軽石中 2年 「ごはんと一緒に」

田中 瞳衣 福岡中 3年 「お母さんのおにぎり」

久保 伶奈 釜石中 1年 「じいちゃん と ばあちゃんのお米」

青木 寧々 桜町中 2年 「当たり前ではない幸せ」

菊池 俊太 桜町中 2年 「未来の農業について 考える」

木村 太郎 桜町中 2年 「人類にとっての米とは」

青木 寧々 桜町中 2年 「当たり前ではない幸せ」

菊池 俊太 桜町中 2年 「未来の農業について 考える」

第48回「ごはん・お米とわたし」

作文・図画岩手県コンクールの概要

応募点数

学校	作文	図画	合計
小学校	20	48	68
中学校	153	12	165
計	173	60	233

応募締切日

令和5年9月1日(金)

第1次審査会

令和5年10月10日(火)

第2次審査会

令和5年12月8日(金)

主催

岩手県内JA・JA岩手県中央会

後援

岩手県・岩手県教育委員会

いわてのお米ブランド化生産販売戦略推進協議会

一般社団法人家の光協会東日本普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所

JA岩手県信連・JA岩手県厚生連・JA全農いわて・JA共済連岩手

審査員(敬称略)

審査委員長	小岩和彦	元岩手大学教職大学院 特命教授
専門審査委員	佐々木俊江	盛岡市立下橋中学校 指導教諭
専門審査委員	山下るり子	盛岡市教育委員会学校教育課主任指導主事
審査委員	和泉光一郎	岩手県農林水産部流通課 流通企画・県産米課長
審査委員	村上吉孝	(一社)家の光協会普及文化本部東日本普及文化局 文化委員
審査委員	船津貴	(株)日本農業新聞東日本統括支所東北支所 支所長
審査委員	工藤孝志	JA岩手県信連 代表理事専務
審査委員	藤尾芳彦	JA岩手県厚生連 常務理事
審査委員	林伸彦	JA全農いわて 県副本部長
審査委員	坂本昇	JA共済連岩手 県副本部長兼管理部長
審査委員	照井仁	JA岩手県中央会 常務理事

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

JA岩手県中央会 JA支援部[組織広報班] 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519

ホームページ <https://ja-iwate.or.jp/> Eメールアドレス kouhou@jaiwate.or.jp

〔発行〕
令和6年2月5日

〔企画・編集・発行〕
JA岩手県中央会

〔印刷・製本〕
川嶋印刷株式会社



国消
—こくしょうこくさ—
国産



「国消国産」とは、国民が必要とし消費する食料は、できるだけその
国で生産するという考え方。JAグループ独自のキーメッセージです。